

## 石屋のイロハ(7)

### 石屋の機械化 ①

今回は石屋に機械が導入された頃の話をしてします。

石を「切る」「削る」「磨く」作業は、職人から職人へ手仕事脈々と受け継がれてきた訳ですが、昭和28年頃から急速に機械化されてきました。私の記憶では、店の鍛冶場(かじば)(道具を作ったり直したりする場所)の火床(ひどこ)に風を送る鞆(ふいご)に代えて送風機を導入。又、文字彫り作業は以前はノミとタガネとツツで行っていました。この道具に代わるものは、現在はエアー(空気圧)を動力にしたチッパーですがそれと同じ様なもので電気を動力としたものが導入されました。【図①】

(なお、現在の文字彫刻は高い空気圧を掛けて強い勢いで硬質の砂を噴射するサンドブラストという機械で行っています。)

石磨きは砥石を使い人力で石の表面をすりおろし、滑らかにしていました。これは大変体力と手間のかかる作業でした。それが機械化によって仕上げも良くなり、時間も短縮されました。その機械は移動式で角の砥石を3丁取り付け、モーターで回転させます。砥石の上から圧力を掛けるために石を乗せた研磨機でした。【図②】

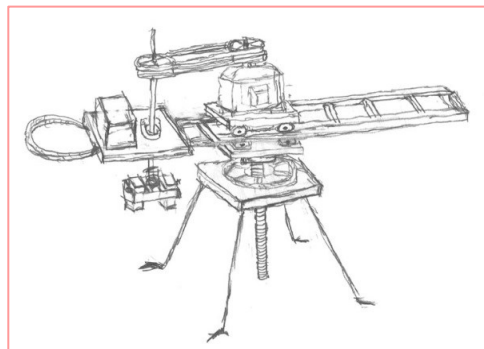
その後まもなく切削機が作業場に動き出しました。これは直径が8インチ(1インチ=2.5cm)の丸のこの先にダイヤモンドチップをつけたもので、1回の切り込み寸法が約4~5cm程度の小規模な物でした。【図③】しかしいずれもそれまでの手作業に比べると本当に驚きでした。能率も上がり、楽で、当時の職人たちにとっては夢の様だったと思います。(私はまだ小学生でした。)

その頃から現在までには、それぞれ同じ作業を行う機械も多くの改良と進歩によって、すばらしく便利になりました。続きは次回で紹介いたします。

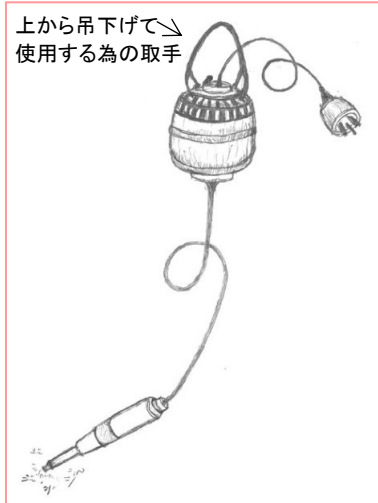
※今回の機械の絵は60年程前の当時の記憶を辿りながら描いてみました。

また次回の石屋のイロハもお楽しみに。

【齋藤繁樹】

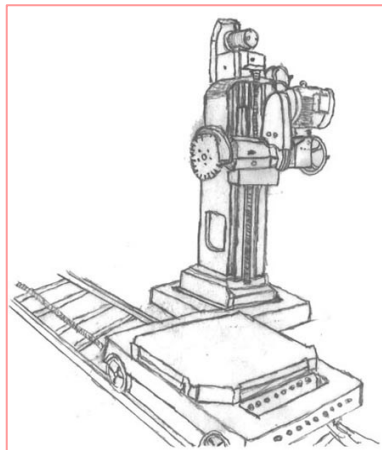


↑図② 石磨きの機械(60年ほど前の記憶のイメージ図) 左側に飛び出ている部分の下部に砥石を取付け、上から圧を掛けて研磨する。左端の輪っかは職人が砥石の位置を操作するハンドル。



上から吊下げて使用する為の取手

↑図① 電動でノミ(タガネ)打ちをする機械(昭和30年頃) 図の左下にある先端にノミ(タガネ)が付いており、電動のモーターで先端が振動する事により石に当たった部分を削る事ができる。従来の様にツツ(鎚)を振らなくて良くなった。



↑図③ 切削機 手前の台に石を乗せて移動し、本体に設置された直径8インチの刃で切削する。

### 編集後記

今号もお読みいただきありがとうございました。この冬は雪が少ないので夏の時期に水不足になったりしないか、と少し心配しております。とは言え、日々の雪掻きが無いのはとても助かっております。春までに山には降って、里にはほどほどであればいいなあ、と願っております。ではまた。 【齋藤勇介】

このニュースレターに関するお問い合わせ・ご意見・ご要望はこちらまでお願いします。お届け先の変更や、ニュースレター送付不要の際もお知らせいただければ幸いです。(担当: 齋藤 勇介)

(有) 齋藤石材店 〒950-3321 新潟市北区葛塚4804 Tel:025-386-3491 Fax:025-386-3493 E-mail:saitougs@beach.ocn.ne.jp ホームページ:http://www.saitougs.com/

# 齋石季報

平成31年 冬号 (第8号)

(有)齋藤石材店 新潟市北区葛塚

あけましておめでとうございます。皆さんなじみのお正月でしたかね？この冬は今のところ雪が少なく、お正月は穏やかな天候でしたので、皆様も良いお年を迎えられたのではないのでしょうか。しかし世間ではインフルエンザなどが流行してきております。まだまだ寒い時期は続きますので、皆様どうぞ自愛ください。



平成31年、明けましておめでとうございます。旧年中は大変お世話になりました。本年も何卒よろしくお願い致します。

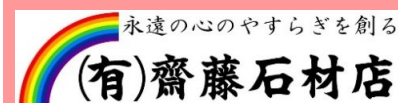
昨年はこのニュースレターへの応援などを沢山いただきました。読んでいただき、支えてくださっている地域のお客様のお陰様をもちましてまた新しい年を迎えられました。心より感謝申し上げます。

今年はいよいよ平成という一つの時代が幕を降ろし、新しい時代が幕を開ける変化の年です。変化しているのは時代だけではなく、社会も急速に変化してきております。石屋を取り巻く環境も、昭和~平成初期とはずいぶん変わりました。しかし、人が故人を偲ぶ気持ちは変わらないものだと思います。ただ、お墓参りに行く機会は昔に比べると減ってしまっている様に感じます。

新年を迎えても珍しく雪が少なかったのも、初詣ならぬ初お墓参りに行ってきました。清々しい気持ちでお墓と向き合え、ご先祖様と対話できた様に感じられました。新潟では雪の無い新年は珍しい事ですが、お盆やお彼岸、故人のご命日などだけではなく、行ける時には気軽にお墓参りをしてみたいかたがでしょうか。きっとご先祖様から何か得られる事がある様に思えます。

さて、今年も(有)齋藤石材店はおお客様のご要望に応えられるよう精進してまいります。これからもよろしくお願い申し上げます。

【齋藤勇介】



ホームページ: <http://www.saitougs.com/>  
E-mail: [saitougs@beach.ocn.ne.jp](mailto:saitougs@beach.ocn.ne.jp)

齋藤石材店 新潟 で検索

本社・工場  
新潟市北区葛塚(正尺)4804  
日本海沿岸東北自動車道  
豊栄新潟東港I.C.すぐ近く  
Tel: 025-386-3491  
Fax: 025-386-3493



太平店  
新潟市東区太平2丁目1-31  
国道113号沿い  
新潟空港の目の前です  
Tel/Fax:  
025-275-9638





### 誰も教えてくれないお墓の力(ちから) 今野栄一朗 著

齋石季報第4号で紹介させていただきましたこの小冊子について、1章ずつ内容を抜粋して連載しております。

#### 第4章 死後の世界は誰にもわからない

わからない話には、さまざまな考え方や解釈がたくさん出てきます。お墓の世界でも「お墓の供養のやり方を間違えると災(わざわ)いが起きる。墓石の作り方で家運が悪くなる。病人が出る」などと、どちらかと言うと、人を怖がらせるようなマイナス的な話がよく登場します。

しかし、それらの話には何の根拠もありません。ではなぜ、そんな話が出てくるのか？それはそのような話を誇張している人や団体に、それを信じた人たちから、何らかのお金が入ってくるシステムがあったりもするからです。

私も昔、知人の方から「有名な霊能者の先生がいるから、会って見ないか？」と誘われてシブシブ行った事があります。私が名刺を出し、その先生に挨拶をし終えると、先生は、私の後ろに「霊が憑(つ)いている、何とかしなければ」と言ってきたのです。

そこで、思わず言ったことが……  
「今までに、たくさんのお墓を作ってきましたから、100人や200人の霊は憑いていると思いますよ！お陰様で我が社は大きな問題もなく、仕事の方も順調です。霊の皆さんには、私は大変感謝しているんですよ！」と、口から出てしまったのです。

その私の話を聞いて一番驚いていたのが、霊能者の先生です。先生は一瞬「エェッ！」と声を上げ、キョトン！？としておられました。

「霊が憑いているから、何とかしなければいけない」とか言っていたのに、とたんに先生は「今日私は、時間がないから」と言って、相手にしてもらえなくなってしまいました。  
「霊が憑いている」と言われ、喜ぶような人間は、いくら有名な霊能者の先生でも、あまり好きではないようです。

また、私たちの仕事はお寺さんと接触することも多く、お坊さんにもいろいろな方がおられます。以前私はあるお坊さんに、このような質問をしたことがあります。

「神や仏は本当にいるのでしょうか？ 供養すると死者が仏になるのは、本当でしょうか？」

するとそのお坊さんは、このようにお答えになりました。  
「私は、仏様にお会いしたことはありません。あの世にも行った経験がないので、死後の世界もわかりません。しかし、この世の人々が亡くなった方を軽視し、神や仏を信じなくなったら、どんな世界になると思われますか？自分ではわからなくても、私は信じているから、仏にお仕えする僧侶をしています」

先ほどの訳のわからない霊能者の先生と違い、このお坊さんのお話は、とても説得力のある話だと思います。

「私は3年ほどあの世に行っていました！」と言うような人がいれば、このような話はとてもわかりやすいのですが、結局、死後の世界や霊などは誰にもわからない話なのだと思います。

どうせ白黒ハッキリしないことなら、保守的に考え、悪いことを重視する必要はないと思います。意味もなく不をさけるより、前向きに徳を積むことを考える。良いことは、疑うことより信じるのが、幸せの近道だと思います。

#### 第4章 完

今回の背景の絵は新潟市北区神谷内 地藏院庵住様よりご寄稿いただきました。

この冊子の紹介はこの先も続きます。お読みいただくと新たな気づきが得られ、とても腑におちる話だと思います。どうぞ期待下さい。

### 「国産銘石アドバイザー研修(茨城編)」に行ってきました！

この程、(一社)日本石材産業協会主催「国産銘石アドバイザー研修(茨城編)」に社長と私とで参加してまいりました。この研修は国内の採石・加工の現場を実際に見学することなどを通じて深みのある知識・情報を習得する事を目的としております。今回、茨城県産の「真壁小目石」と「稲田石」の産地を1泊2日で巡る研修で、小売石材店を中心に全国各地の石材業関係者43名が参加しました。(石材業関係者とは石屋だけではなく、機械・道具の間屋などの関係企業も含んでおります。)

初日は、最初に桜川市役所真壁庁舎に設置されている「最後の大名」浅野長勲と綱子夫人の石像を見学しました。この石像は真壁の天才石工と呼ばれる稲田亀吉とその弟子たちによって造られたもので、機械の無い百年前のものとは思えない昔の石工の妙技と同時に真壁石の耐久性の高さに驚きました。

次に真壁小目石の丁場へ見学に行き、広大な敷地の丁場で大きな岩盤を目の前にしながら採石方法や真壁小目石の特性について学んだ後、加工工場見学で切削から研磨までの工程をポイントを押さえながら学びました。



浅野長勲と綱子夫人の像  
この像は、以前浅野家の菩提寺である傳正寺にあったが、震災で甚大な被害を受けたため、現在地に移設されたとのこと。



真壁小目石の丁場にて  
これまで丁場見学をしたことが無かったので、初めてこのような採石場を見ました。高くて怖かったです。



加工工場にて(むしり仕上げ)  
この工場での加工内容は、ほぼ当社が行っているものと同じでした。当社の加工技術の高さを実感しました。

翌日は稲田石の丁場・工場の見学でした。ジェットバーナー・火薬・ワイヤーソーという採石工法の違いなどを学んだ他、石割の体験もしました。また ビシヤン仕上げなどの石工職人による手加工の実演も見学しました。

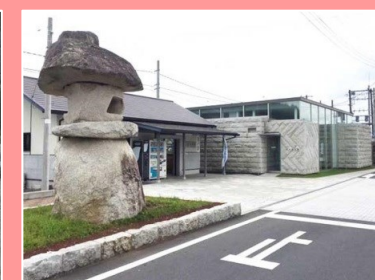
次に稲田駅に隣接した「石の百年館」に立ち寄り、稲田石の成り立ちや特性などの多彩な展示品を見学しました。その後 親鸞聖人が約20年の歳月を過ごし「教行信証」の草稿が作られたと伝えられる浄土真宗別格本山の西念寺に行き、稲田石の採石の歴史にも詳しいご住職の講話を拝聴した後、座学と修了テストで研修を終了致しました。

関東地方を中心に石材供給を担ってきた茨城産地の歴史は古く「真壁小目石」と「稲田石」は迎賓館や最高裁判所、東京駅などの重要な建築物にも使われて来た事を改めて学びました。

今回の研修はそうした深みのある歴史にふれると同時に国産材の国内加工という純国産墓石の販売に直結できる知識・情報・ノウハウなどを習得できた有意義な研修会でした。



稲田石の丁場



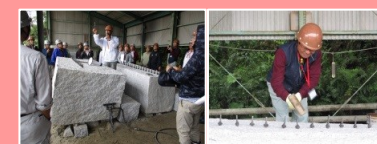
JR稲田駅(左)と「石の百年館」(右)



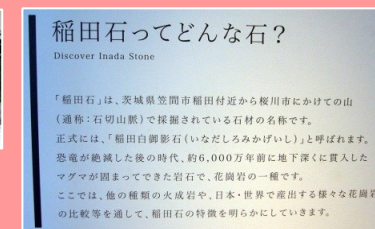
浄土真宗別格本山の西念寺境内にあった燈籠(右の写真)の台には「新潟県」「長岡玉日講中」と刻まれており、新潟県から寄進された物でした。新潟県は浄土真宗が多く、この地との繋がりが深いのだと感じました。



新潟県から寄進された燈籠



丁場に隣接する加工場にて当社でも実演している石割体験が行われました。参加者は石材業関係者なのですが、中には私を含め初めて見ると言う方が結構いた様でした。



石の百年館の展示パネル  
稲田石の特性が分かり易く展示してありました。

社長と二人、テストに受かり無事に「真壁小目石」と「稲田石」の修了証をいただきました。→



「真壁小目石」と「稲田石」は、国産の白御影石として特にお薦めしている石でもあります。今回の知識を活かすべく、皆様にも茨城の石の魅力をお伝えしていきたいと思っておりますので、お声掛けいただけると幸いです。【小山泰弘】